bunka@ryukyushimpo.co.jp
TEL 098-865-5162

沈黙に向き合う
沖縄戦 聞き取り47年
〈113〉

石原 昌家

先人の遺志継承こそ
琉球、軍配備拒否を懇願

歴史修正主義を正す⑨

島守の塔の入り口に建つ歌碑の作者北白川祥子という名を知ったのは、2005年のことだった。

08年3月19日に沖縄靖国神社合祀取消裁判をおこした原告の一人・金城実彫刻家に専門家証人になることを私は依頼され、安良城米子沖縄国際大学非常勤講師（当時）と共に沖縄タイムス、琉球新報両紙の「靖国神社」「援護法」に関する記事を検索した。そのとき私は1970年から勤務してきた大学の定年2年前にして、遅まきながら戦後沖縄社会の未知の世界を知ることになった。

北白川氏の来島

1958年というのは、沖縄戦の被害住民である0歳児まで軍人軍属同様の扱いにする援護法の適用とセットで靖国神社に合祀されていく年となった。すかさず旧皇族の北白川祥子靖国神社奉賛会長が沖縄を訪問することにもなった。58年1月7日付琉球新報3面に〈全琉戦没者慰霊祭／日本代表の顔ぶれ決まる〉の見出し記事につづいて、〈北白川さんも来島／沖縄遺族連合の招へい〉の中見出しのもと、〈全琉遺族の要望として靖国神社奉賛会長北白川祥子さんをはじめとする靖国神社代表四氏を正式に招くことになった〉（慰霊祭参列後約一週間にわたって中南北部の各地の戦跡を巡拝する）。

慰霊祭当日の1月25日付沖縄タイムス夕刊には、式典記事につづいて〈「北白川さんの話」初めて沖縄の土地を踏み、戦没者の法要に参列できたことは、感慨深いものがあります。ことに私は遺族の一人として全国八百万遺族の方々のために大戦で戦没した二百二十万の英霊を合祀する大事業をしておりまして、全国各地を行脚しています〉と、靖国神社復活の大役を果たしていることを紹介している。これを機に、沖縄戦被害住民が靖国神社に大々的に合祀されていくのを地元新聞社は「朗報」として伝えている。（詳細は拙著『国家に捏造される沖縄戦体験―準軍属扱いされた0歳児・靖国神社へ合祀』インパクト出版会、231～260ページ参照）

先日、東京で出版活動中の川満昭広氏に「内なる皇国史観」を話題にしたら、2014年6月23日の「慰霊の日」に安倍晋三首相が「島守の塔」を訪れた映像を見せてもらった。軍官民一体の新たな「島守」意識形成に着手していたかと思い、本連載担当の宮城隆尋記者に、当時の新聞検索を依頼した。すっかり忘れていたが、なんと私がその件に関し、コメントしていた（写真参照）。

新たな「島守」

〈島守の塔を初めて首相が訪れるというのは、相当な思惑が秘められていると言ってよい。軍事国家の完成を目指す安倍晋三首相は自衛隊の国防軍化を企図している。宮古・八重山など南西方面への配備を強行しようとしているその自衛隊を「島守」と自負したいのだろう。安倍首相は「島を守る」「国を守る」ことを掲げて軍備強化を図ろうとしている。軍備が強化されればされるほど、住民にとっては大きな被害が生じる危険性が増すだけだ〉（琉球新報2014年6月24日3面）と、すでに私は分析していた。ことはその通りに推移している。

それから8年後のいま、安倍首相の延長線上の岸田首相のもと「避難シェルター」（防空壕）整備を検討するほど、戦争の危機が目前に迫っている。

いまこそ、琉球国の先人たちの軍備に対する考えをかみしめ、私たちの立脚点を確認すべき時だ。明治政府が琉球を日本の版図に組み込もうとしたとき、琉球人の平和の心がほとばしり出ていた。

仲地哲夫沖縄国際大学教授（当時）が「琉球処分官」松田道之の『琉球処分』上巻381ページ「琉球藩官員へ説諭応答ノ始末」（明治8年3月31日）に明示されているその内容を、漢文の読めない私に読み解いてくれた。その要点は、明治政府が沖縄に軍隊を配備しようとした時、小国琉球は今日まで対外的に専ら礼儀を尽くして応対してきたので、事なきを得てきた。軍隊と兵士が配備されたら隣国に疑惑をもたれ、難題が生じるかもしれないので、配備を思いとどまってくれと懇願している。以下はその読み下し文である。

軍備拒絶の原点

「先だっても申し上げ候通り、周回百拾里ほどの所、兵器をもって外憂の防あい整うべき大きさにてこれなく、外国人渡着の節々もっぱら礼儀をもって応対いたし、これまで無事平穏あいすみ来たり候。分営（軍隊のこと）召し建てられ多人数入り込み（兵士のこと）あいなり候はば、人心疑惑いたし候段は申すに及ばず、御内地とはあいかわり、遠隔の小邦色々ことわずらわしく成り立ち申すべきや、ことさら本藩の儀、皇国支那へ属したてまつり、御両国の御隆をもって一国の備えあい立ち、上下万民安堵致しおり候ゆえ、皇国御奉公支那への進貢は本藩軍大の規模万世万代相変わらず忠誠を励ましたき本願に御座候ところ、分営召し建てられ候はば、支那へ対し何分申し開きあい立つまじく、よく御洞察あらせられ候とおり、数百年来親切に取り扱はれ恩義厚き国柄、自然都合取り損ない候ては信義あい立たざる段は勿論、何様の難題成り立ち申すべきや、かたがたもって至極胸痛つかまつり候。外憂御懸念のところも承知つかまつり候へども、各国の船々渡来の節々御在勤官員衆御応接なられ、猶事柄次第御本省へ御指図を得、御取り計らいならることにて、外国より侵侮の憂いはこれあるまじきやと存じ奉り候あいだ、前文かたがたの情実御賢察あそばされ、何卒これまでの通り召し置かれ下されたく、幾重にも懇願奉り候こと。亥四月一八日」（『平和学の現在』法律文化社、石原論文「沖縄住民と軍事基地」139～141ページ）

しかし、1875年の軍隊を拒絶する琉球の民の心は踏みにじられた。その行く末が沖縄戦、自衛隊配備、辺野古新基地建設の強行、新たな自衛隊ミサイル基地化、そして、いま直面している沖縄戦再来の危機だ。ならばその先人の遺志の継承こそが、私たちの生きる道だと共有したい。

（次回は11月掲載）

首相「寄り添う」空疎
ボーリング、来月
憲法解釈変更と
戦没者追悼式

安倍晋三首相（当時）が島守の塔を訪れたことを報じる2014年6月24日付の琉球新報